第１分科会　小学部

思いを伝え合い、人とつながる授業づくり
「みんなでわくわく～白兎ふれあいの森へいこう～（生活単元学習）」

鳥取県立白兎養護学校
教諭　倉光　紘佑
西山　佳亜
山口まり江

１　はじめに

本校は、前身となる鳥取市立養護学校白兎学園（病弱）を経て、昭和５２年１１月に県立学校として開校し、今年で創立４０周年を迎えた。

写真１　「森」から見た学校

鳥取市に位置し、県東部地区の知的障がい教育の拠点としてセンター的機能の推進に努めている。現在、小学部、中学部、高等部、訪問学級の３つの学部・学級に１４７名の児童生徒が在籍しているが、近年の傾向として、在籍児童生徒数の減少、障がいの多様化が進んでいる現状が見られる。

２　白兎ふれあいの森

写真２　「森」の入り口

本校は、神話の里「白兎海岸」を臨む自然豊かな環境に恵まれており、開校当初より、地域の様々な環境を活かした学習活動を推進してきた。

校庭に隣接する裏山には片道数百ｍ程度の山道があり、農作業の圃場としての活用のほか、時折、体力づくりを目的として利用していたが、険しく危険な箇所も多く存在しており、利用できる児童生徒はごく一部に限られていた。

そこで、鳥取県教育委員会戦略事業の一環として、裏山の整備作業を実施し、児童生徒にとって魅力ある学習環境である「白兎ふれあいの森」として生まれ変わらせるための取組を進めることとなった。平成２８年度に、教職員、保護者、おやじの会、地域住民等が協力して山道の整備等を行うとともに、休憩小屋や各種遊具の設置等を行った。

今後も、児童生徒の健康な身体づくりや様々な人々との楽しい交流の場として、また、地震や津波時の避難にも活用できる場として、この裏山を活用しつつ、本校らしい特色ある教育活動を推進していきたいと考え、校内で検討を進めているところである。

３　本校小学部における生活単元学習

（１）生活単元学習で大切にしていること

①「自分から」「自分で」「存分に」活動する経験の積み重ね

・児童の興味や関心をひきつける題材の工夫

・見通しを持つ、わかる・できる楽しさを感じる、主体的に活動するための工夫

②子どもにとっての自然な流れ

・児童の思いや経験に合わせた展開の工夫

③つながり

・「友だち」とのつながり、「生活」とのつながり、「学び」のつながり

（２）単元「みんなでわくわく」の実践

①　単元について

「みんなでわくわく」は、年４回（６月、９月、１１月、１月）にわたって計画・実施した単元であり、１単元につき約１ヶ月間実施した。四季や季節の自然にかかわりのある「遊び」を題材にしつつ、児童が「自分から」「自分で」「存分に」楽しむ活動を通して、互いに思いを伝え合い、友だちや教師とつながることの楽しさや心地よさを感じることのできる授業づくりをめざして取り組んだ。

９月の学習では、主な学習場所として、「白兎ふれあいの森」を設定した。「白兎ふれあいの森」は、山道が整備されただけでなく、遊び場としての広場や遊具なども設置されており、児童が楽しみながら秋を見つける絶好のフィールドである。草や木、昆虫などの自然に親しみながら夢中になって遊ぶ体験は、児童の思いを表出させるきっかけとなり、その思いを教師が意図的につないでいくことで、まわりの友だちや教師を意識したり、人とかかわったりすることへの興味・関心を高めていくことができるのではないかと考え、本単元を計画した。

②　児童の実態

本学習集団は、小学部３年生の２学級合同（男子６名）で構成されている。２学級ともに重複障がい学級であり、知的障がいと併せ有する障がいも多様である。

人とのかかわりの面では、友だちへのかかわりを好み自分から積極的に関係を持とうとする児童、教師の支援を受けながら友だちを意識したりかかわりを持とうとしたりする児童、環境の変化や予測のできにくい物事に対する不安が強く、自ら好んで積極的に人とかかわろうとはしない児童等、実態は様々である。感触遊び、野外での活動、調理等に興味・関心をもっており、そこに合わせた題材を設定していくことで、６人全員で活動することができるようになってきた。

③　学習のねらい

〇　季節を感じながら、友だちや教師と一緒に活動する。

〇　友だちや教師とかかわりながら活動する中で、自分の思いを言葉や身振り等で表現する。

④　単元計画

６月	「みんなでわくわく」 ・泡遊び　・新聞プール、ボールプール　・小麦粉粘土　・調理（クッキー）
９月	「みんなでわくわく～森へいこう、秋をみつけよう～」 ・秋みつけ　・ぬたくり（落ち葉作り）　・落ち葉プール　・お面作り ・秋のころころコースター（制作、遊び）　・かくれんぼ　・調理（月見団子） ・ピクニック
11月	「みんなでわくわく～おいもランドで遊ぼう～」 ・秋みつけⅡ　・いもづるリース作り　・ぬたくり（さつまいも作り） ・いも版遊び　・おいも号（制作、遊び）　・おいも風船（制作、遊び） ・ゴーゴースリー（いもづる電車遊び）　・調理（おいもきんちゃく）
１月	「みんなでわくわく～冬を楽しもう～」 ・はねつき（制作、遊び）　・たこあげ（制作、遊び）　・書き初め ・すごろく　・調理（団子）

⑤　９月単元「みんなでわくわく～森へいこう、秋をみつけよう～」

ア　環境設定

・「白兎ふれあいの森」は、季節の変化や草木などの植物等の自然を存分に感じることができる。またブランコ、ハンモック等の遊具が整備されたことで、児童が楽しみながら秋を見つけることができ、児童にとって魅力ある場である。
・子どもが「森」で拾ってきた葉っぱや木の実と、秋の植物を教室に飾り、秋や「森」を身近に感じられるようにした。

イ　指導の実際

・「白兎ふれあいの森」へ行って落ち葉や木の実を拾って「白兎ふれあいの森」への関心を高めることにした。子どもたちは袋いっぱいに落ち葉や木の実を拾った。また毎回、絵本「もりへいこう」の読み聞かせを行った。いろいろな形の落ち葉を探したり、友だちや教師に「はっぱ！」と言って見せたりする姿が見られた。
・自分たちで拾ってきた落ち葉を落ち葉プールに使い、葉の手触りや肌触りを楽しんだり、拾ってきた木の実を使ってペアで協力しながら「ころころコースター」を作り、繰り返し木の実を落として遊んだりした。
・子どもたちの顔の大きさくらいの大きな葉っぱを見せて、「これで何か作ろうか？」と問いかけると、絵本に出てくる「おめん！」と声が上がり、その場ですぐに大きな葉っぱに木の実を貼ってお面を作った。今度は「お面をして何かして遊ぼうか？」と問いかけると、今までしたことのある「かくれんぼ！」と声が上がった。出来上がったお面を付けて、「○○さん見つけた！」と声をかけながら友だちを見つけたり友だちと一緒に隠れたりして楽しんだ。

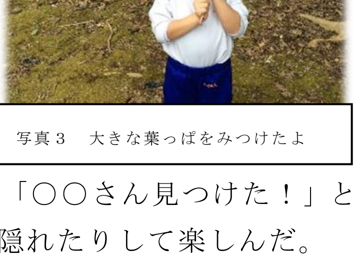

写真３　大きな葉っぱをみつけたよ

ウ　人とつながる工夫

〇ペア活動

・活動するペアを固定することで、ペアの友だちを意識し、一緒に活動しようと働きかける場面が見られた。そして、ペア間での役割を分担し、交代しながら作業をする等の協力をして制作活動をする場面を設定した。

・かくれんぼでは、隠れる人は胸に「どんぐりシール」を貼り、「〇〇さん、見つけた！」と言われたら、シールを鬼の人に手渡すルールを設定した。友だちの名前を呼んだり、発語がない児童も友だちとやりとりをしたりしてかかわる姿が見られた。

〇機器の活用

・毎時間、児童が学習活動を振り返って発表するときには、児童の活動場面の写真を映し出すようにしたことで、児童は自信を持って発表できるようになった。また聞いている児童にもわかりやすくなり、友だちの発表に注目するようになるとともに、活動したことを共有できるようになった。学習が進むにつれて、写真の一覧の中から自分の伝えたい場面を選んで発表する児童も出てきた。

写真４　写真を見ながら発表

⑥　成果と課題

・「森（裏山）」での学習を重ねたことで、学習以外の場面でも「裏山（に行きたい）！」と言う子どもが出てきた。子どもたちが体験したことから出てきた思いを元に学習を展開したことで、より「自分から」「自分で」主体的に活動を楽しむことができた。

・児童が活動する姿から思いをくみ取り、教師間で共通理解しながら学習を組み立て発展させていった。児童も教師も「秋を感じながら、自然の中で友だちと一緒に楽しむ」というテーマを共有し、共に活動することで仲間意識も高まってきた。

・秋を感じるには９月という時期の設定は少し早く、１１月の単元でも落ち葉や木の実を見つけに行く活動を設定し、季節の変化を感じられるようにしたことで、自分から赤や黄色の葉っぱを探し、見つけて喜んでいる児童の姿も見られた。

・自分の思いを十分に伝え合うことは難しく、教師が適切な言葉を伝えたり思いを代弁したりして表現を広げていくための支援の工夫をしていきたい。